

丸山晚霞記念館だより 第1号

当館に関連する情報を、お知らせします。
今後、およそ年2回程度の発行ペースで、
内容はホームページにも掲載します。

- ・2014年度企画展「太平洋に馳せる夢 -若き日本人画家たちの冒険と浪漫」について
- ・特別展示「宮地志行」について

6 Japanese artist at Boston Art Club in 1900.



 **EXHIBITION of JAPANESE PAINTINGS in WATER COLORS**

Boston 1900.12.5 ~ 12.15
Providence 1901.1.9 ~ 1.15
Washington 1901.3.10 ~ 3.23

BANKA MARUYAMA 丸山 晚霞
HIROSHI YOSHIDA 吉田 博
TAKESHIRO KANOKOGI 鹿子木孟郎
SHINZO KAWAI 河合新蔵
KUNISHIRO MITSUTANI 満谷国四郎
HACHIRO NAKAGAWA 中川八郎

Katsuzo Takahashi 高橋勝蔵
 Kokki Miyake 三宅克己
 Fujio Yoshida 吉田ふじを
 Tojiro Oshita 大下藤次郎

 **太平洋に馳せる夢**
 -若き日本人画家たちの冒険と浪漫

2014.9.13(土) ~ 11.3(月・祝)

Banka Museum Tomi City
丸山 晚霞 記念館
 信州 東御市



丸山晚霞記念館 HP
 ■〒389-0515 東御市常田 505-1 ■TEL 0268-62-3700 ■FAX 0268-62-3262 ■午前9時から午後5時 ■会期中無休 ■¥200(高校生以上)

2014年度企画展

「太平洋に馳せる夢」 —若き日本人画家たちの冒険と浪漫

2014年9月13日(土) ~ 11月3日(月・祝)

今回の企画展は、いまから100年以上も前に、自分の描いた作品を携えてアメリカに渡った日本人画家たちを特集して開催します。

明治維新で水彩画や油彩画が日本に入ってきました。明治政府は当初積極的に美術にも西洋文明を取り入れましたが、やがて国粹主義により、西洋美術が排除されると、当時の西洋画家たちが一致団結して、明治美術会を結成しました。

そのうちの黒田清輝がフランスで学び帰国すると、東京美術学校の教授となり、明治美術会を脱して白馬会を結成します。

黒田清輝率いる白馬会は「新派」、明治美術会は「旧派」と呼ばれ、展覧会でも冷遇されるなど、その勢いは衰えてゆきました。

明治美術会にいた丸山晚霞、吉田博をはじめとする今回の主役たちは、白馬会になみなみならぬ対抗心を燃やしていました。国費でヨーロッパに留学する彼らを横目にしていた彼らも、三宅克己のアメリカでの成功に影響され、自分たちもその力量を試すために渡米することを日々熱望していたのです。

資金に大きな不安を抱えつつも、あるアメリカ人を頼りに吉田博、中川八郎の二人が、1899年に渡米します。頼りの人物はあいにく長期不在、ところが幸運にもデトロイト美術館館長に見いだされ、アメリカ各地で展覧会を開催するという奇跡的な展開となりました。この知らせを受けた丸山晚霞らは、1900年続けとばかりに渡米します。

アメリカで合流した彼ら6人は、ボストンアートクラブで「日本人水彩画家6人展」を開催、この展覧会は11日間でなんと18,763人が訪れる大盛況となりました。

この後、プロビデンス、ワシントンで6人展を開催し、彼らは一躍時の人となりました。

技術的には水彩画発祥の地・イギリスには彼らよりもすばらしい画家がいることを、アメリカ人は知っていました。ではなぜ、これ

ほどまでに日本人水彩画家たちは好評を得たのでしょうか。

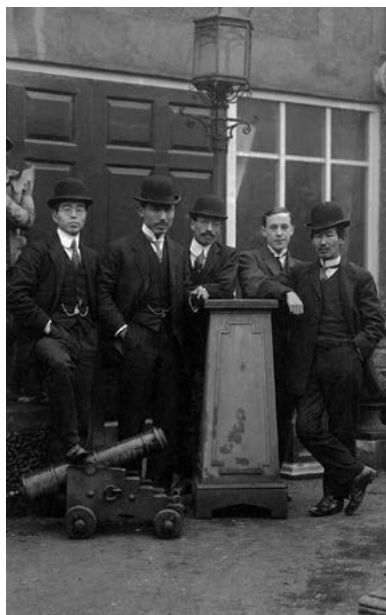
彼らの描いた水彩画は、西洋画法を用いながら、浮世絵や仏像などに通ずる「ジャポニズム」として受け入れられたこと、英国人水彩画家に劣らない技術であったこと、アメリカが西へ開拓を進めた際に出会った壮大な風景（現在のアメリカ国立公園を想像して下さい）が、風景画をジャンルとして受け入れていたことなどがあります。

彼らには「西洋に学び、より自分を研鑽したい」という共通の

願いがありましたが、これは「西洋かぶれ」ではなく、「西洋に学び、日本人の描く水彩画というものを確立したい」という意味合いで考えるとよいのだらうと思います。

国際人ということが近年言われていますが、彼らは日本人としての誇りを持ち、日本文化をしっかりと海外で発表したことをみれば、立派な国際人であったといえるでしょう。現代社会ではインターネットと航空路の充実によって、国と国の境が低くなって、国際人などとやたら言われること自体、現代の「日本人度」は彼らより希薄になっているように思います。

アメリカから渡欧、右から丸山晚霞、不明、河合、鹿子木、満谷



アメリカから欧州巡遊ののち帰国、丸山晚霞らは、前述の明治美術会を解散して「太平洋画会」を結成、「白馬会」に対抗する日本美術の二大勢力となりました。

彼らはいわば、野武士集団であります。その心意気と行動力に、明治の男たちの気骨を感じます。「美術」の定義づけを、喧々囂々とやり合っていた時代は、今よりもずっと熱気に満ちていたに違いありません。

明治は貧しく不便であったが、夢を持てる時代だった。現代社会には、「頑張れば必ず報われる」という当たり前のことすら、裏切られる。何を信じて生きればよいのか、皆見つけられないのです。

世の中が便利になり、モノが豊富にあることが、人の幸せとは必ずしも比例しないのだということを、痛感した次第です。

このドラマはこれから先に、もう一つの夢を見させてくれます。展覧会場でお待ちしております。

出展作家は、丸山晚霞、吉田博、鹿子木孟郎、河合新蔵、満谷国四郎、中川八郎（以上6人展メンバー）、高橋勝蔵、三宅克己、吉田ふじを、大下藤次郎。水彩画と素描で総点数90点から100点の予定です（高橋勝蔵のみ油彩）。（S）

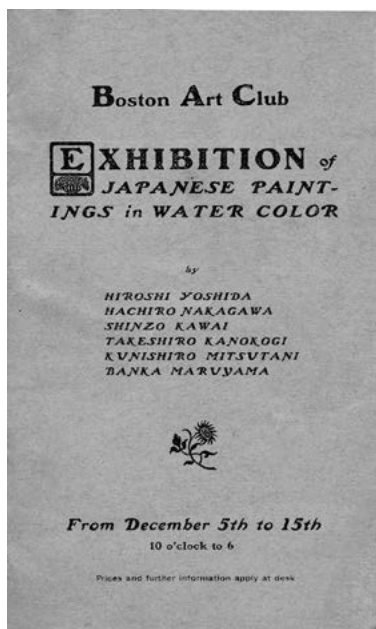
毎週土曜日 15時より ギャラリートーク（10/18を除く）

ムービーを公開中

YouTube

青雲画士

Q



特別展示

「宮地志行」^{みやちしこう}について

「太平洋に馳せる夢」展の会期中、コーナーを設け宮地志行の遺作を特別展示します。

「宮地志行」との出会い



ある日「宮地志行宛てに丸山晚霞が出したハガキを所有しているの、関心があれば連絡を」という電話があったと伝言を受けました。連絡してみると、それはネット上でも公開しているというので、そのサイトを見てみると、なるほど一枚のはがきがアップされていました。印刷の賀状だったので、私はそれほど関心をかきたてられずだった

のですが、ほかにも歴々の画家たちからの書簡やらハガキが公開されていて、いったい宮地志行という画家はどういう人物なのかに興味を持ちました。そして志行の作品ページを見てびっくり！相当の力量が感じられました。

略歴を見れば、太平洋画会の会友、日本水彩画会においては創立会員とあるので、丸山晚霞と接点があったのは自然なことですが、惜しくも45歳の時、結核で亡くなっている。私は連絡をくれた、志行の孫にあたる宮地完行氏にさっそく連絡し、ハガキよりも志行の作品に驚いたことを伝えると、その後話が進み、遺作を拝見できることとなり、志行の生家のある岐阜県瑞浪市へと出かけました。

完行氏がコツコツと自分の祖父を顕彰しているそのことに私は頭の下がる思いでありました。だからというわけではないですが、これほどの力量を持ちながら、早世して埋没している宮地志行に、非力ながら光をあててみたいと思ったのです。梅野隆初代梅野記念絵画館館長の下で門前の小僧をした私の「直感」と言っては生意気ですが、丸山晚霞との関係などはこれからじっくり調べるとしても、今年の企画展にあわせて数点でも展示しなければならぬように感じたのです。

太平洋美術会、日本水彩画会は歴史も長く、先人の仕事に敬意をもって活動されており、会の歴史に宮地志行がいたということをお知らせできる機会でもあります。

企画展の会期中に、スペースの都合上数点となりますが、特別展示をいたします。(S)

宮地完行氏による、宮地志行のホームページ

http://www.geocities.jp/shikoh_miyachi/

宮地志行（みやちしこう）のこと

志行は私の祖父だ。私が生まれた時、すでに他界していた。

東京の千駄ヶ谷に住み、画業なかばで結核をわずらい慶応病院で亡くなった。45歳の生涯。明治・大正・昭和の三時代を駆け足で走り去った。



幸い、志行の妻光枝は存命だったので、私は志行のことを色々聞いていた。アトリエは岐阜県の山里の中、優しい光の中に静かに建っていた。室内には多数の遺作が置いてあり、それを見ながら育った私は今も絵画が大好きである。

私の父は、出征と戦後の混乱の中、とても志行の遺

作を整理する余裕は無く、私も仕事の忙しさを都合のいい理由にして、暫く遺作は放置されていた。

やっとなら私数年前に定年を迎え、山形村の私の現住居にも何か絵を飾ろうと思いついて、岐阜にある志行の絵を数枚持って来ようとアトリエ（老朽化で取り壊し現在は倉庫）に絵を取り出そうと行ったのだが乱雑に積み重なっており、出すことも出来ない。そこで重い腰を上げて整理を始めたが私の現住所から遠い為、未だ仕事半ばである。

絵以外にも、色々出てくる、そこでホームページを立ち上げ発見された資料を掲載しながら現在に至っている。

世の中は不思議な縁で繋がっている。資料の中に丸山晚霞が志行に宛てたハガキがあった。私がホームページで丸山晚霞を調べていたら、“晚霞に関する資料があったら連絡を”という記述を見つけた。早速に話した所、とても丁寧な対応をいただいた。佐藤学芸員だった。運命の出会いだった。

私は山が好きだ。大阪の大学時代の夏休みに石鎚山や北アルプスを歩いた。山にのめり込み、大阪では信州の求人はいくらもなかったが、卒業と同時にアテもなく信州に引っ越し、翌日から職安に行き“山が好きで引っ越して来たが何か仕事は無いですか”と粘って雇用促進住宅に入居した。

信州の山々を描いた丸山晚霞の水彩画は少しではあるが当時から知っていた。山を見る目・山が好きで優しく見守る目は、おこがましいが晚霞と私は同じだと思っている。

佐藤氏からは、寄稿するにあたり私に、“まとめられてこられた志行に関する記事を綴っていただけるといい”言われていたが、私はいつも話が脱線する。勘弁願いたい。

私の絵好きの為か、今でもつきあう数人の友人知人の画家がいる。

私は作品などを紹介するホームページを作るのが趣味で得意なので、会う度に、その友人知人たちに、“あなたの作品を紹介するホームページをタダで創ってあげる、そうすれば多数の人たちに見てもらえて、記録にもなっていないじゃないか”と勧めていた。しかし、いつになっても、彼等はあまり乗り気になってこない。ある時、その中の親しい友人の一人に、“何か、自分のホームページ良くないのかなあ”と聞いてみた。彼曰く、

“そうじゃない。絵を描く時は夢中になって全て他の事は棄て置き、気持ちを集中して一番いいもの描こうと思って描く。そして、その時は、良い物が出来た、と書いていても数年経ち、百枚以上も作品が出来て、今思うと、当時は良いと思って描いた絵が何と幼稚で恥ずかしい物か、棄ててしまいたい絵が何十枚もある。いつまでたっても、その繰り返しだよ。”というのだ。

私は、“棄ててしまうなら、その絵を私に出来ないか”と、喉元まで出かかった言葉を、ぐっと堪えた。

私は思った。

そうだ、誰もそうだ。皆、前だけを見て未知の世界を知ろうと描いている。

作品を残そうとか、名を残そうとか、そんなことを少しでも思ったら絵は描けないものだ。後ろを振り返った時、その人は進むのを止めてしまうのだ。

それからというもの、私はホームページの話は出さない。彼等も解っていて、自由にやっている。それでいい。

きっと、志行もそうだった、と思う。

志行の故郷の古い人に伝え聞いたことがある。

志行は子供のころ、いつも棒切れを持って、地面に絵を描いていた。それが友達や村の人たちに人気で、彼は喜んで何でも描いているのが遊びの様なものだった、と。

作品がどうのこうの、ということは後々の人がやればいいことだ。志行は、好きなだけ絵を描いて逝った、と書いていたい。

(宮地完行)



〔複製〕 押絵

宮地志行略年譜

- 1891(明治24) 岐阜県土岐郡日吉村半原に生まれる。本名景樹(かげぎ)。父は小学校校長、のち日吉村長。
- 1909(明治42) 岐阜県立東濃中学校卒業と同時に上京。岡精一に師事、高間惣七、中村不折にも学ぶ。洋画、水墨画、水彩画など幅広く修業。
- 1913(大正2) 日本水彩画会創立に宮地景樹の名で参加
- 1918(大正7) 加知光枝と結婚。
- 1923(大正12) 東京と岐阜を往き来する生活となる。横山大観、下村観山、石井柏亭のほか、童話作家安部季雄、沖野岩三郎、久留島武彦、版画家小山良修、八木岐平、作家横山美智子、大仏次郎、林芙美子、北川千代とも親交をむすぶ。昭和初期よりラジオ雑誌・時事新報・雑誌「少年」「少女」「主婦之友」などの表紙、挿絵を担当
- 1931(昭和6) 母校の日吉第一尋常高等小学校の改築・設計案を担当。郷土の半原操り人形浄瑠璃のための大道具・小道具等も主なものは殆ど志行の製作であった(昭和29年不慮の火災で焼失)。
- 1930(昭和5) 太平洋画会会友推挙
- 1933(昭和8) 銀座の川島東京店にて個展開催
- 1936(昭和11) 結核により死去。享年45歳

(資料: http://www.geocities.jp/shikoh_miyachi/)

話題いろいろ:

■水上勉原作「越前竹人形」若州人形座公演

11月1日(土) 午後2時、6時 東御市文化会館 ¥3,000

恋愛の名作を、水上勉自身の脚本で演じる不滅の人形劇!

■山から長野県が受ける恩恵に感謝し、持続的に享受してゆくために、毎年7月第4日曜日が「信州山の日」と制定されました。

現在の常設展は、山をテーマにしていますが、中でも大正2年に描かれた六曲一双屏風「日本アルプス」「欧州アルプス」は、大傑作といえます。今年、ご厚意により寄託となりました。



■日本美術全集 17 前衛とモダン 北澤憲昭著 小学館刊

当館収蔵品(倉沢コレクション)「高原の秋草」が掲載されました。一冊¥15,000の豪華本です。

丸山晚霞記念館だより 第1号改訂版

発行: 丸山晚霞記念館 TEL 0268-62-3700